

“Sorge”の周辺

—ハイデガーと「ファウスト」—

弘前大学医療技術短期大学部

助教授 三浦 秀春

はじめに

『存在と時間』においてハイデガーが、人間はその存在の根底からしていかに“Sorge”によって貫かれ規定されているものであるかを、我々の日常的現象から鮮やかに剝つて見せてくれた時、我々は、時代を画する人間理解に出会った震撼に襲われたと言っても過言ではない。それは、我々がいかなる存在であるかを、同時に又、いかなる存在であらねばならないかを、我々の臚げな了解の内から白日の描像のもとに自覚させてくれたものであり、“Sorge”という描像によって惹起された我々人間の自己理解は、明らかにこれまでとは違った存在の根拠を確信するに至ったと言える。

これほど画期的で魅力的な概念をハイデガーはいつたどこから着想したのか、その着想の由来と意図に関しては個人的に以前から気に掛かっていたところである。と言うのも、ハイデガーは、この“Sorge”を『存在と時間』においていかにも唐突に登場させ、この概念をいわば「前提」にして基礎存在論を展開させているように見えるからである。

ここに与えられた機会に、⁽¹⁾フライブルクでの在外研修の際（昭和六十四年十月～平成元年四月）に得た手懸かりをもとに、「帰朝報告」を兼ねてその辺りに関する私見の一端を披露させて戴くことに

する。

1. "Sorge" の登場

"Sorge" は、言うまでもなく、ハイデガーの『存在と時間』の中心概念のひとつである。と言うよりは、それがなければ『存在と時間』そのものが成り立たない主導概念であり、少なくとも、既刊の『存在と時間』はこの概念に先導されて構成されていると言っても過言ではない。

従って、我々が『存在と時間』を読む時にも、"Sorge" をいわば「前提」にして読んでいるのであって、さもなければその全体はなんの意味もない「虚構」に過ぎないと言うことになってしまう。

ところが、それほど重要で魅力的なこの概念は学術的定義らしい定義を殆ど伴っていないのである。"Sorge" の記述にかかわるその中心的な部分においてすら、「現存在の存在は、"Sorge" という姿で現れる」(s. 242)⁽²⁾ といわば断言されているだけであって、その理由の説明も根拠の提示もなされていないのである。

それどころか、ハイデガー自身が、「にもかかわらず、現存在を "Sorge" とする、ここで試みられている存在論的解釈の存在的端緒がそもそも牽強附会のように思われるかもしれない」(s. 243) ことは承知しているのであって、「それ故、現存在を "Sorge" とする実存論的解釈には、前存在論的検証を必要とする」(ibid.) と断った上で、"Sorge" の由来を暗示する "cura" の寓話に主題をつないでいるのである。

そもそも、ハイデガーにとっては、人間的存在が何故 "Sorge" でなければならぬのか、強いてあげれば、人間の日常的現象と構造全体を見通すのに都合のよい核になる概念という以上の、積極的

な理由や説明が見当たらないのである。

しかもこの概念は、日常性から現存在の構造を言わば析出し、その全体性を見渡す際の「媒介」の役割を担っているのであるから、ハイデガーは、この言葉の日常的含意をも十分に考慮し、そこから生じ得る誤解をも承知して敢えてこの言葉を取り上げているのである。

この語の日常的用法については実に多義的であり、ハイデガーはむしろその多義性を利用して言わば「語義解釈的分析」を展開しており、そのため“Sorge”の訳語を一定することすらが不可能な程である。

ハイデガー自身はまたこうも言っている。「そこに見て取れるように、伝統的で実証ずみの人間の定義が排除されている強引さについては言うまでもない」(ibid.)と。つまり、当初から従来の「人間観」を覆す意図をもって、敢えて「人間の定義」として“Sorge”を持ち出しているのである。

しかし、それほどに意図的に提起された概念であるにもかかわらず、その根拠は明示されずに、“cura”の寓話のうち、「現存在は、自分自身の身について考えてきた限りにおいては (so es sich über sich selbst aussprach)」、たんに前存在論的にはあるが、そもそも既に一身を“Sorge”(cura)と受け止めていた」(ibid.)という例証が求められているだけなのである。

ハイデガーが、自ら牽強附会の謗を免れないことを承知してまで、この概念を核心に据えたのは何故なのか。その事情は必ずしも詳らかではない。

それは、存在論が現象学的解釈学であらざるを得ないと言う際の、いわゆる「投企の横暴 (die Gewaltsamkeit des Entwurfs)」(s. 414)によるものだとしても、それが恣意的でないという保証はどこにもないのであるし、その点に關しても、ハイデガー自身が十分承知しているのである。何故それ程までにしてハイデガーは“Sorge”にこだわったのか。

一説によれば、『存在と時間』そのものが短期間に、従って十分推敲がなされないままに成立した可能性があるとされている。⁽³⁾ “Sorger”の登場の根拠が希薄なものもその辺りの事情が絡んでいる、とみることもできる。おまけに、いわゆるケーレ以降この概念は姿を現さなくなるのであるから、この概念はますます暫定的で恣意的な性格を帯びてきて、こうした概念に頼ったからこそ、むしろケーレという蹉跌を招いたのではないかとすら思われる。いざれにせよ、“Sorger”は、『存在と時間』の舞台の中心に、それも様々の衣装をまとうて登場する主役兼舞台回しとして、言わば忽然と現れてそして姿を消すのである。

だとすれば、“Sorger”は偶発的でいかげんな概念であり、それを「前提」とする『存在と時間』そのものが無価値でうさんくさいものだからということになるであらうか。

しかしながら、ハイデガーの思索の周到さからいってとてもそんなことは考えられないのであって、ただそうなると、仮に人間の伝統的定義を排したとして、それと比較しての諸他の可能性の中から何故“Sorger”が選り取られたのか、その説明のないのが却ってますます疑問とならざるを得ない。

むしろこうした事情を考えると、そこにはハイデガー自身の余程の思い入れがあると逆に考えざるを得ないのであり、それからすれば、ハイデガーは、無数の可能性のうちから、熟慮して外ならぬ“Sorger”を選り抜いたという訳ではなく、むしろ、“Sorger”がたまたまハイデガーによって目に止められ、「あれだー」という思いによって掬い取られた、といった事情が察せられるのである。

無論断るまでもなく、そうした事情によって選択された概念だからといって、必ずしもその価値が無いとか低いとか言うことになるものではない。それどころか、そうした選択が我々に暗示してくれるのは、その概念には、多年求めていたものに出会った一瞬の閃きが輝き得るのであって、むしろ問題となるのは、たまたまの出会いが閃きに点火し得た、その点火剤となったものが何であり、そこに

込められていた「思い」がどのようなものであったのかということである。

従って、換言すれば、ハイデガーが人間存在を、*"HOMO CURANS"*とも評さるべき新たな「人間定義」を招く*"Sorge"*という着想にいかにしてたどり着き、何故それにこだわったのかという問題は、そこにハイデガーがどのような「人間像」を描く「思い」を込めていたのか、という問いを解き明かすことに外ならないことになる。

Ⅱ. *"Sorge"* 着想の由来

ハイデガーに*"Sorge"*という閃きを与えた、その点火剤となったものは何であったのか—結論から言えば、それは無論*"cura"*の寓話以外ではあり得ないのであって、それとの出会いが、ハイデガーに人間存在を*"Sorge"*と確信させるにいたった決定的な要因であったと思われる。しかしながら、それは我々の通常の「理解」とは異なっているかもしれないので、迂路ながら、*"Sorge"*の着想と*"cura"*の寓話の例証との関係を見ておこう。

通常我々は「存在と時間」を、その論述の運びからして、ハイデガーの脳裏にはあらかじめ*"Sorge"*という概念が「先に」着想されていて、その証拠固めのために「後から」*"cura"*の寓話が「たまたま」例証として上げられているのだ、という「順序」で読んでいる恐れがある。

確かにハイデガーの記述の運びはそうなっているし、肝心の寓話の典故に関する注記においても次のように記述されている。

「現存在をゾルゲとする実存論的—存在論的解釈にとつての以下の前存在論的例証に、筆者はK・

ブルダッハの論文『ファウストとゾルゲ』を通じて出会った。(S. 262)

この文章からする限り、ハイデガーがブルダッハの論文を読んで“cura”の寓話に出会ったのが「たまたま」であったことは、“stoßen”という用語からして察せられる。問題は、「現存在を“Sorge”とする解釈にとっての(für)例証」という時の両者の関係である。というのはこの文章は、あたかも「ルビンの図」のように、前提となる「地のコンテキスト」のとりかた次第で、「図となる解釈」が変わってくるからである。

一般的には、解釈が「先行」して、その証拠固めの「ための」例証と読まれ得るのであって、そうすると、解釈の裏付けとなる「寓話」だけが偶然に見つかったと理解されることになる。

ところがこの一文は「現存在を“Sorge”として解釈するに当たった例証」即ち、例証に出会って、その「結果」現存在を“Sorge”として解釈するに至ったとも読めるのであって、そうなると、偶然に出会ったのは“cura”の寓話だけではなく、それを「通じし」“Sorge”の着想にも行き着いたのだと言うことになる。

その辺りの問題がこれまでどのように意識されて来ているのか、因にここで、該当箇所訳文例をいくつか参照してみる。

松尾啓吉 訳 (勁草書房、上巻、三三五頁、一九六〇年)

「著者はK・ブルダッハの論文『ファウストと憂』によって、現存在を憂とする実存論的—存在論的解釈にとっての、以上のような前存在論的例証に蓬着した。」

桑木 務 訳（岩波文庫、中巻、一三八頁、一九六一年）

「著者はK・ブルダツハの論文『ファウストと関心』によって、現存在を関心とする実存論的∥存在論的解釈にとつての、右のような前存在論的な証拠にぶつかりました。」

細谷・亀井・船橋 訳（理想社、上巻、三三一頁、一九六四年）

「現存在を関心とする実存論的∥存在論的解釈のために以下に引用される前∥存在論的証件を、著者は偶然に、K・ブルダツハの論考『ファウストと憂い』によって発見した。」

原 佑 訳（中央公論社「世界の名著」、三三九頁、一九六四年）

「著者は、K・ブルダツハの『ファウストと気遣い』という論文をつうじて、現存在を気遣いとして実存論的・存在論的に学的に解釈するための、以下のような前存在論的な証拠に突き当たったのである。」

辻村公一 訳（河出書房「世界の大思想」、一三六頁、一九六七年）

「著者が、現有を関心と解する実存論的∥有論的解釈のための以下の前有論的証拠に行き当たったのは、コンラート・ブルダツハの論文『ファウストと憂』を通じてである。」

各訳者の「言葉づかい」による相違はあるものの、当該の問題に判定を下してくれそうな訳出例は見当たらない。というよりもそこには、ここでの問題に関する留意が払われていないのであって、ある意味では問題にならないのである。

無論それは、原文そのものが「ルビンの図」的解釈の余地をもっているからに外ならないのであって、因みに原文はこうなっている。

„Der Verf. stieß auf den folgenden vorontologischen Beleg für die existenzial-ontologische Interpretation des Daseins als Sorge durch den Aufsatz von K. Burdach, Faust und die Sorge.“
(ibid.)

しかしながら、「Für diese Form gibt es im Germanischen keinen Beleg⁽⁵⁾」といった用例からしても、「現存在をゾルゲとして解釈する」その「(目的の)ために」、後から意図的に「cura」の寓話が持ち出された訳ではないことだけは確実である。

とするならば、ハイデガーは、偶然に「cura」の寓話のうちに現存在を「Sorge」とする例証を見いだしたのであって、「Sorge」の着想の由来は「cura」の寓話そのものにあつたと言ふことができる。換言すれば、ハイデガーにとっては、「Sorge」の着想そのものが「偶然」によるものであつたのであり、そうであればこそ、この概念の「牽強付会」に関して、「回りくどく弁解がましい」「釈明」を行っているのだと言ふことができるであらうし、『存在と時間』の問題設定をも無理なく理解することができるのである。

例えば、そうした理解の上に立って初めて次ぎの一文も意味をもってくる。

「以下に取り上げる例証（「cura」の寓話）は、（現存在の存在を「Sorge」とする）実存論的解釈が勝手な思い付き（Erfindung）等なのではなくて、この解釈が、存在論的『構築』の上で、ちゃんと

した地盤を持つものであり、その地盤に伴って、解釈上の基礎的見取り図をも手に入れているのである、ということを明瞭にするはずである。」(S. 261-2)

つまり、「Sorge」の着想は「偶然」ではあるが決して「思い付き」などではないのであって、従って「現存在の分析論」という建物全体もきちんとした地盤の上に立脚しているものであり、しかもその地盤と共に、「cura」の寓話を手引として、分析論の基本的構図をもそこから得ているのである、ということである。考えてみれば、土台もなにもないところからひとつの観念を思い付くなどということのほうが余程無理があつて、あり得ない話ではある。

こうしてみれば、ハイデガーは、「Sorge」の着想の由来をきちんと明示しているのであって、それが見当たらないと思うのは、我々の側のある種の「思い込み」によるものではないかと思われる。と言うのは、第一に『存在と時間』の主導概念である「Sorge」が「偶然」に発見されたものであるなどということがある訳がない、という思い込みである。それは第二に、「偶然」思い付き「いい加減」という連想が働いており、従って逆に、ハイデガーが「勝手な思い付きではない」と言うとき、それはイコール「偶然ではない」という思い込みが伴っている。

最後に、何と言っても、思索に厳格なハイデガーが、「寓話」などという言わば日常的「非哲学的根拠」に依拠しているはずがない、という思い込みがある。それが又、「cura」の寓話を、『存在と時間』の構成上では単なる幕あいの「エピソード」に過ぎないと思わせることになる。それが証拠には、「Sorge」をテーマにした論文は枚挙に暇がないほどあるが、寡聞ながら、「cura」をまともに主題にした「論文」にはお目にかかったことがないのである。

III. „cura“ 寓話の役割

原文にしてわずか五頁に満たない“cura”寓話の挿入は、たしかに現存在の分析論という楽劇の「間奏曲」に過ぎないのかもしれない。しかしそこに言及されていることは、楽劇全体の展開上重要な意味をもっている。

実は、『存在と時間』において、“cura”の寓話に言及している問題の第四二節は、

„Die Bewährung der existenzialen Interpretation des Daseins als Sorge aus der

vorontologischen Selbstausslegung des Daseins“ (s. 261)〔現存在の前存在論的自己開陳に由来しての、現存在をソルゲとする実存論的解釈の適性証明〕と銘打たれているのである。

つまりここでは、現存在を“Sorge”として解釈することの言わば「適格性」が、“cura”の寓話に由来して立証されているのである。

具体的には、“cura”のこの \wedge 二重の意味 \vee は、被投的投企という、それに本性的な二重構造においてひとつである根本的体制を意味しているのである。(s. 264)とされているように、“cura”の「二重の意味」に由来して、「被投的投企」という“Sorge”の重要なエレメントが取り出されているのである。

更にまたここではこう言われている。「 \wedge 生活の心配 \vee と \wedge 献身 \vee といったことの「二重の意味の」可能性の実存論的前提条件は、いわゆる根源的な即ち存在論的な意味においては、ソルゲとして概念的に把握されなければならない。」(s. 264-265)と。

つまり、“cura”はもともと本性上「生活の心配」と「献身」という二重の意味合いをもっている

のであるが、そうしたことが起こり得る前提となる可能条件をより根源的な意味で考えるならば、その可能条件が“Sorge”として概念化されざるを得ないのである、ということであって、ここで初めて、“cura”が“Sorge”として把握し直されているのである。

従ってハイデガーは、「現存在の存在論的解釈は、この存在者のへSorgeとしての前存在論的自己開陳を、ゾルゲという実存論的概念にもたらした」(S. 265)と言っているのである。

因に、ここでハイデガーが“へSorge”とわざわざ記述しているのは、無論、“cura”をそのままドイツ語に置き換えた表現であるが、ここにひとつの誤解の余地がある。

このことから明らかのように、ハイデガーは、偶然出会った“cura”の寓話からその語をドイツ語での“Sorge”に置き換え、“cura”のもつ「二重の意味」を手引きとしてそれを実存論的概念としての“Sorge”の着想に転換したのである。

ところでもうひとつ、“Sorge”の着想の由来を誤解させる記述がある。この第四二節にはハイデガー自身による注記が三カ所あるのであるが、その三番目の注の中で次のように言われている。

「前掲書四九頁。ストア派において既に *Neôcura* は確定的術語であったし、新約聖書において、*Vulgata* では *solicitudo* として、復帰している。―上述の現存在の実存論的分析論においてたどられたへSorgeへの視線 (*Blickrichtung*) が著者に生じたのは、アリストテレスの存在論において達成された根本的諸基盤を考慮しつつ、アウグスチヌスの―即ちギリシャ―キリスト教的な―人間学の解釈をいくつか試みる関連においてである。」(S. 264)

うっかりするとこの文章は、“Sorge”への着目は、アリストテレスの存在論を基にアウグスチヌ

スの人間学を解釈する試みのうちから生じた、と読まれる得るのであり、従って、“Sorge”の着想の由来もそこに示されているのではないか、と思われるのである。しかもハイデガーは *Μέριμνα* や *solicitudo* としての “Sorge” の前史も指摘しているのであるから尚更である。

しかしそれは、文中の \wedge Sorge \vee を実存論的概念としてのそれと混同していることによる。前掲の引用文中において明確に使い分けられていたように、このカッコつきの \wedge Sorge \vee は “cura” のドイツ語表記であり、従って右の文章は、「“cura” に注がれた解釈の視線が著者に生じたのは」という意味であり、それは、“cura” に着目するにいたった背景を述べたものであって、言わば “cura” に着火して “Sorge” が閃くことを可能にしたハイデガーの多年の関心の所在を物語るものである。

むしろこの記述は、ハイデガーの当時の問題関心を下敷として、いかにして偶然目にとまった “cura” の寓話から “Sorge” が明確な輪郭を持つ描像となるに至ったかを窺わせるものである。

ところでこれまでは “cura” の寓話の役割の言わば形式的・表面的側面のみを指摘してきた観があるが、無論ここで問題なのはその意味・内容上においてもっている役割である。がその前に、引用した注記の本文での指示位置に関して、故意にでないとすればある種の錯誤が見られるのであり、それが注記の文章の理解はもとより、本文の内容の理解にも影響していると思われるので、その点についてまず言及しておくことにする。

引用した注記の参照を促す本文での指示は、文頭で主語となっている人名の右肩のところに「Burdach³」と示されている。この指示の仕方は、通常当該文章の末尾に置かれている他の場合の用法と異なっており、従って注記の方の文章が本文の内容のどこまでに拘るものなのか曖昧になっている。

実は、私自身がこのことに気が付いたのはフライブルク滞在中のことであり、ハイデガーが “cura”

の寓話に偶然出会った文献としてあげている、当該の K. Burdach の論考 „Faust und die Sorge“ を実見できたことによるものである。⁽⁶⁾

それから見ると、本文では注記の指示が及ばない独立した次の文章のように見える、従って、ハイデガー自身の地の文章のように思われる「そこでセネカはその最後の書簡(124)でこう書いています」以下のパラグラフ全体の文章が、実はブルダッハの論文からの引用文になっているのである。つまり、ここで参照すべき注記は、指示箇所以下パラグラフの全体に拘るべきものである。

ところで、ブルダッハの当該論考と『存在と時間』の当該部分とを突き合わせてみると、他にも二カ所、ブルダッハの記述にあるものがハイデガー自身の筆によるものであるかのような体裁になっている部分がある。

そのひとつは、当該節の注(一)で、「ヘルダーの詩『憂いの子』(ゾーフアン版全集第二九卷七五頁)参照」と、ハイデガー自身が脚注をつけたようになっていいることである。この注は、「この〔„cura“ によって〕形造られたもの〔homo〕の根源的√存在がどこに見られるべきかについて、その裁定はサトゥルヌス、すなわち八時間√にかかっている。」(s.263) ことを述べた、『存在と時間』の中心テーマに拘る極めて重要なものであるが、„cura“ の寓話をドイツ語に訳したこのヘルダーの詩の全文と、サトゥルヌスを「時間」とするヘルダー自身の脚注の件も、実は、ブルダッハがその論考において呈示している(s.42-43)ものなのである。

ふたつめは、先に引用した注(三)のなかで、「ストア派において既に *hēgouan* は確定的術語であったし、新約聖書において、*Vulgata* では *solicitudo* として、復帰している。」と、これまたハイデガー自身の指摘のような体裁になっているが、これについても、ハイデガーがあげている引用頁「前掲書四九頁。」の二頁前で、ブルダッハによって次のように記述されているのである。

「ソルゲの新約聖書での見出し語 (Μέριμνα, Vulgata: sollicitudo) は、既に、ストア派の道德哲学および修養学 (Kulturwissenschaft) において確定的術語であった」(S. 47)

こうして見てみると、『存在と時間』の当該節は、重要な部分において、殆どがブルダッハの論考をなぞっているものであることが解るのであり、「cura」の寓話というよりは、ブルダッハの論考そのものの影響が多大であることが窺えるのである。

IV. 人間を「完成」する「Sorge」

ハイデガーがブルダッハの論考から思想内容的に得たものは、なんといっても「cura」における「二重の意味」ということである。

ところが、ハイデガーはそれを直ちに「被投的投企」という実存論的解釈に持ち込んでしまっているので、この「cura」の「二重の意味」も言わばそのために「利用」されているだけのような印象を我々に与えてしまい、ハイデガーがそこからいかに多大のインパクトを得ているかという側面が見過ごされてしまっている。

無論、そうした側面が薄れてしまうのは、ハイデガー自身がその辺りの記述を殊更さりげなくしている節があることにも起因している。すでに指摘したように、ハイデガーの引用の仕方や脚注の付け方が、ブルダッハの本文を見ない限りおよそ曖昧で、見当違いの解釈をしてしまう恐れもっていることもそのひとつである。

しかし内容の理解上もっと影響が大きいのは、ブルダッハへの言及が殊更に簡潔になされていることである。肝心の「cura」の「二重の意味」に関するハイデガーの言及はこうなっている。

「ブルダッハ」は「cura」√という術語の二重の意味に注意を喚起しており、それによれば、この語は「気（Hingabe）」√を意味してゐる。」(s. 264)

これに対して、ブルダッハの論考での該等箇所は次のようになってゐる。

「'cura」というラテン語は二重の意味を含んでゐる。この語は、『憂（Sorge）』『煩（Besorgnis）』『気の休まらない苦勞』とともに、『愛惜（Fürsorge）』『優寵』、『献身』をも意味してゐる。」(s. 49)

ここでハイデガーが省いた 'Sorge' 'Besorgnis' 'Fürsorge' が、『存在と時間』において実存論的に解釈し直されて相互に関連しながら重要な役割を果していることは言をまたない。しかしそれ以上にここで注意を引くのは、ブルダッハが挙げている用語例を見れば、そこにある明確な対比があることが見て取れることである。

すなわちブルダッハは、負の価値を負う「日常的心勞」に類する意味と正の価値を帯びる「道義的苦勞」に値する意味とを対比させてゐるのである。

このことからすれば、ハイデガーが、現存在の分析論において「日常性」を現象学的解釈論の地平としながら、しかも、わざわざ「倫理の意味合い」はないと断りつつも、その「日常性」を「非本来的類落態」として性格付け、「本来性」と対比させた理由が解るのである。

この点に関しては、ハイデガーの「引用」や「生活の心配」√と「献身」√といった対比でも窺えないことはないのであるが、それだけからでは、その対比に込められている意味合いは浮かんでこないし、まして、『存在と時間』の構えに込められたハイデガーの趣旨や由来は見えてこないのである。

このブルダッハの記述は、更にもうひとつのことを示唆してくれる。即ち、「死へ先駆け」、「良心の声を聴く」ことで生起するとされる、「実存的—実存論的変容」による「本来性」の姿がハイデガ

の記述でははっきりとしないのであるが、ブルダッハの用語例を見れば、ハイデガーが具体的に何を念頭にしていたのかが明らかになる。

というのは、ブルダッハのこの対比は言外にもうひとつの意味合いを含んでいるからである。即ち、「日常的心労」は、「自分本位」に物事（物と人を含め）に拘りあう態度であるのに対して、「愛惜」、「優寵」、「献身」といった「道義的苦労」は言うまでもなく言わば「他在本位」に物事に貢献する態度を特徴付けているものである。

ハイデガーがそこから「本来の実存」の在り方の具体的なイメージを汲み取っていたであろうことは想像に難くないのであって、それはハイデガーが、間接的であったり二次的な体裁においてではあるが、ブルダッハへの言及に引き続いて次のように人間の「善」や「完成」について触れていることからしても明らかである。

「善」に関してはセネカの書簡を引き合いに出すことで触れている。即ち、「四種の実存する生存在（樹木、動物、人間、神）のうち、独力で理性が備わっている後の二者は、神が不死であるのに対し人間は可死的であるということによって區別される。ところでこの両者の場合、一方の善すなわち神の善を完成するのはその本性なのであるが、他方の場合つまり人間の場合には、（その善を完成するのは）ゾルゲ (cura) である」(264)と。

既に述べたように、この記述はブルダッハが「cura」の「二重の意味」に関連して続いて引用しているものなのであるが、それをわざわざ切り放して独立した独自の引用の体裁になっているのは、ハイデガー自身が無論この記述を知っていたからとも考えられるが、むしろ、この記述の内容を強調したかったからではないかと思われるのである。その証拠に、ハイデガーはこの記述を直接受けるかたちでこう述べているのである。

「人間の完成 (perfectio)」、即ち、人間が自己の最も固有な諸可能性に開かれた自由存在 (投企) において存在し得るものに成るということ、それは \wedge Sorge \vee の \wedge 成す業 (Leistung) \vee なのである。」 (ibid.)

ところがハイデガーは、上掲の文に直ぐ続けて「投企」と同時に、同じく“Sorge”を根源とする「被投性」を取り上げて「被投的投企」という概念に移行させているために、我々の視線も直ちにそちらに移ってしまい、上掲の文章から目が離れてしまいがちになるのであるが、よく考えてみるとそこには腑に落ちない点があるのである。

というのは、「人間の \wedge 完成 \vee を成し遂げるものが“Sorge”である」という規定は一体どこからきたものなのか、という点が曖昧なのである。

それが“cura”の寓話そのものに由来するものでないことは確かである。何故ならば、少なくともハイデガーが取り上げている寓話における“cura”は、人間を生涯において支配する「心労・苦労」としてのむしろ「負の価値」を物語るものであって、そこには、人間にとっての肯定的・積極的価値は認められない。

それはセネカ以来の歴史の伝統的理解であって、それをハイデガーが再「発見」したということであろうか。それならば何故ブルダッハの“cura”の「二重の意味」の「指摘」に言及する必要があるがあったのであろうか。

実は、ブルダッハは、“cura”の「二重の意味」を指摘し「セネカの書簡」の用例を引用したのに引き続いて、次のように述べているのである。

「従つてここでは、ゾルゲは、「人間を」この世の物質的なものに巻き込み、塵芥に貶めるような下降的な力(Kraft)ではないし、大地から形造られた〔ことに由来する〕人間像の素質といったものではない。ゾルゲはむしろ、大地に生まれた人間を上方へと持ち上げ、あの神が本性から持ち合わせているもの即ち善を人間に身につけさせることによって、人間を神に近づけさせる原動力(Macht)なのである。」(S. 49)

このことから明らかのように、通常は、人間を大地に縛り付け、労苦に見舞わせる元凶として、「憂い」、「煩い」、「気の休まらない労苦」等、否定的・有害的な意味合いのみ受け止められている「cura」という語に、人間を完成させ、人間をその本来の人間たらしめる原動力を認め、再発見したのは、少なくともその再「第一発見者」は外ならぬブルダッハだったのである。

「Sorge」が、人間にとって言わば「負の憂い」であると同時に「正の憂い」であるものとして、人間固有の能力即ち「人間性の能力」であることが確認されて初めてハイデガーは、現存在の存在を「Sorge」として基礎存在論を展開する見通しを得たのだと言うことが出来る。

少なくとも「Sorge」のうちに、人間をその本性的な力で変貌させる可能的根拠がなかったならば、ハイデガーの実存論的分析論は成り立たなかったであろうと思われる。

その意味から言つて、ハイデガーの『存在と時間』は、「cura」の寓話との偶然の出会いと言つたりは、より正確に言えば、ブルダッハの論考の内容そのものとの偶然の出会いによって成り立つたと言わなければならない。

V. ハイデガーとファウスト

ところで、ブルダッハよりも先に“Sorge”のこの「人間の救い」となる力に気がついて、それを表現しようとしたのではないかと思われる人物がいる。それはゲーテであり、その思想を具現しようとしたのが「ファウスト」である可能性がある。

実はブルダッハの論考『ファウストとゾルゲ』は、そのことを論証しようとした試みを見せてくれたものに外ならないのである。そしてブルダッハは、それこそが“cura”のもつ「二重の意味」によって、そのことをゲーテはヘルダーの「憂いの子」を介して承知していたことを明らかにすることによって、見事に立証しているのである。

ご承知のように、ゲーテの『ファウスト』第二部では、ドラマが大団団に終わる直前に“Mangel”, “Schuld”, “Sorge”, “Not”という「四人のおぞましい女共」が登場し、そのうち“Sorge”だけが鍵穴から忍び込んでファウスト問答する場面がある。それはほんの幕あいの幕あいの、極めて小さな場面である。しかしそれだけにこの場面は劇的構成上また思想内容上いったいどんな意味があるのか、様々な解釈上の興味を呼んだものであるらしく、ブルダッハの言によればこうである。

「ファウストに呪いをかけ、盲目にした‘Sorge’のこの結末には、いかなるドラマ上の意義、いかなる持ち前があるのであるか? ここにあのように薄気味悪く脅かすように登場するあの四人のおぞましい女共とは誰なのであるか? そのなかで‘Sorge’だけが唯一ファウストへの侵入を果たすのは何故なのか? ファウストの抵抗にも拘らず彼にその権能 (Macht) を振るう‘Sorge’。‘Sorge’はファウストの死に影響を及ぼしているのだろうか?

大方の解釈者達にとって、‘Sorge’によるファウストの盲目化は、あらゆる人間の宿命のうちでも

最も自然なものとして百才の老人を見舞っておかしくない、肉体的失明を象徴的に劇的に表現したものだと思なされている。たとえばクーン・フィッシャーがそうである。だとすれば結局ファウストは、単純に老衰で死んだことになる。」(s.15-16)

ブルダッハの論考はそうした疑問を説明しようとしたものに外ならないのである。

既にお解りのように、ブルダッハはその疑問を“cura”の寓話に込められている。「二重の意味」を手懸かりにして説明し、次のように述べている。

「ファウストは、人生の最期の燃焼のうちに、この世の煩わしさや生存(Dasein)をめぐる日々の闘いについての自分の感じ方を変えるのである。“Sorge”という迫り来る影と格闘しているうちに、内心は不安と絶望を覚えつつもファウストにはある予感が湧いて来る。即ち、“Sorge”は二重の本性を持っているということ、より適切に言えば、否定的、麻痺的、貶降的作用を及ぼす夜の霊や死霊としての“Sorge”の背後に、もうひとつ別の、人間の生存(Menschendasein)における物質的なもの、大地的なものを精神的なものとかかわりにおいて把握し、精神的なものに立脚してその歩みを永遠なもの、理想的なものへと向上させる力を持った、“Sorge”の明るい白日の現れがあるという予感である。いずれにせよ、成し遂げたファウストはこの肯定的な“Sorge”に身を捧げようとするのである。瞬間に向かつて、『停どまれ、お前はいかにも素晴らし〜(Verweile doch, du bist so schön!』と言わんがために。』(s.55-56)

こうしてブルダッハは『ファウスト』の第一部「天上の序曲」において主がメフィストフェレスに言った言葉「ファウスト(人間)が大地に生きている限り、その限りではお前は何をして構わない。人間は努力している限りは迷うものなのだ」という言葉が「努力の果てに死ぬファウストの、最期の、

偉大で、最も高貴な迷いのうちにおいて今や果たされる」(s. 60) と言うのである。

そして更に「最期において (Im Sterben) ファウストは Sorge の子と成る。ただしあのおぞましいデーモンではなく、愛惜 (Fürsorge) というより優しい守護神 (Genius) ののである」(ibid.) と結論している。

こうしてみればブルダッハは、『ファウスト』の幕あいに登場したに過ぎなかったように思われていた“Sorge”の解釈を通して、実は、本質的には神の力によって救われるのでもなければ、諦観や絶望のうちに空しく果てるのでもなく、「日々の憂い」に過ぎない“Sorge” そのものの力によって「完成」する存在としての「ファウスト」像、取りも直さず新たな「人間像」を描きだしたことになる。

本題に翻るならば、ブルダッハのこの論考を読んだハイデガーが、“Sorge”の解釈を通しての新たな「人間」理解に無縁であったなどということが出来るであろうか。ブルダッハの論考の中から、たまたま「現存在を“Sorge”として解釈するに足る例証」としての“cura”の寓話」を発見しただけであるなどということが出来るであろうか。

それどころか、ブルダッハの論考を通して目で見るならば、『存在と時間』に秘められている「人間像」があぶり出しの絵のように透けて見えてくるのであり、むしろ逆に、ブルダッハの論考によって明らかになった「ファウスト像」を下図にして『存在と時間』を讀解してみると、ハイデガーが「現存在の分析論」に込めた趣旨や意図が明確に見えてくるのである。

いま改めて、ブルダッハの『ファウストとゾルゲ』を仲立ちとして、ゲーテの『ファウスト』とハ

イデガールの『存在と時間』を読み合わせると、そこには、「Sorge」の意味役割を基にした基本的な「人間理解」に驚くほどの符合が見られるのである。

たとえば、『ファウスト』のなかでの「Sorge」はこんな風に描かれている。

「耳が私を聞き取ることはなくても／心のなかではざわめき響く、／様々に姿を変えて／私は恐るべき力 (Gewalt) を振るう。／小道の上でも、波の上でも／気の休まらない (angstlich) 永遠の道連れ／常に見いだされるが、請われた訳ではなく、／ご機嫌だろうが、癪にさわるうが。――」(s. 202)

「ひとたび私にとり憑かれた者には／あらゆる世界が無益になる、」(s. 203)

これからすれば、『存在と時間』のなかにも同じ音色が響いているのを聴きとめることは容易であろう。一例を挙げれば、右の文章は次のように姿を変えて現れる。

「不安の当の相手は全く無規定である。この無規定性は、どの内世界的生存者が脅かすのかということが事実上未決定であるばかりでなく、内世界的生存者がそもそも何問題に√ならないということの意味している。世界の内部において手元の用に又客体的に存在するそのどれもが、不安が自ら気が休まらない当の相手としての役目をはたしていかないものである。手元の用にたつものや客体的にあるものの、内世界的に見いだされた趣向全体性が、それとしてそもそも重要な〔な関心〕ではないのである。世界は全くの無意義性という性格を帯びる。」(s. 247)

ところで『ファウスト』と『存在と時間』に同じ音色が響くのはむしろ道理であろう。何故なら、ブルダッハによって明らかにされた「ファウストとゾルゲ」を通して、ハイデガーはそこに「人間の現存在」と「Sorge」を看取っていたからに外ならないからである。その意味では、『存在と時間』

は『ファウスト』の哲学編を試みたものであると言っても過言ではない。

『存在と時間』においてハイデガーは、いずれにしてもその痕跡を薄めようとしているかのよう
に思われる。しかし、"cura"の寓話に言及した「第四二節」は、その叙述の体裁からして、むしろ雄
弁にそのことを物語っていると云える。

ブルダツハの『ファウストとゾルゲ』に触れた脚注では、「ブルダツハは、ゲーテがヒギーンヌスの
寓話二二〇番として伝承されているCura・寓話をヘルダーから借り受け、それを『ファウスト』第二
部のために改作したことを挙示している。」と記しており、そうしたことを通じて、ハイデガー自身
がかえって『ファウスト』に無縁でないことを漏らしているのである。

おわりに

フライブルク滞在中に、それこそ偶然に "Sorge und Vorsorge (憂いと備え)" と題した大学主催
の連続講演が行われていた。「環境破壊の恐れ」から「エイズへの備え」まで、多種多様の今日の問
題への「憂いと備え」のアプローチがなされていたが、なかでも、フランクフルト大学の政治学者、
I. Fetscher の "Angst und Ent-Sorgung" という題目が目をついた。

通常 "Entsorgung" とはいえ、いま日本でも問題になっている「ゴミ処理」やら、国際的問題にな
っている「核廃棄物の処理」やらを意味するのであるが、Fetscher の "Ent-Sorgung" は、哲学的に
考察されて、人間の生存そのものに由来するゾルゲを追い払うこと (Verdrängen der Sorge) なの
だそうである。

従ってそこには、「死や老化への不安」といった古来のものから、ストレスといった現代的な「心

身医学的不安」にいたるまでが広く対象に含まれ、人間の生存に伴うありとあらゆる「憂いの始末」が網羅されていることになる。

このことは、「Sorge」という概念が人間の生存との関係で改めて考え直されてきており、もはや「前もって、憂いの始末に備え」をしておくのでなければ生存が成り立たないほどに人間の生存状況が変化しつつあることを窺わせるものである。

しかしながら Fetscher にとっては、「Sorge」という概念は依然として人間にとつて忌むべき否定的概念にとどまっております、その限りでは、「Ent-Sorgung」は依然としてそれ自体があらたな「Sorge」ではないという円環を断ち切れないうる。つまり、「Sorge」が「人間の生存そのものに由来する」ものである限り、同時にそれは、「Sorge」が「人間の生存の原動力」でもあることを意味しているからであつて、その意味では「Sorge」は、人間の死をもつて止む「換言すれば、「人間が自分自身を始末」しないことには済まないということになる。

はたしてそれしか人間のとるべき道はないのであろうか。個々人の心労から老人のケアといった社会問題、脳死判定＝臓器移植といった人類的課題等が「Ent-Sorgung」といった概念でそれこそ文字とおり「方が付く」のであろうか。それは単なる「厄介払い (Verdrängen der Sorge)」に終わる危険はないであらうか。

私ならむしろ、ゲテ＝ハイデガーの響にならつて「Für-Sorgung (憂この癒し)」といった概念に期待したいところである。

いずれにせよ、こう考えてみると、ゲテやハイデガーが、「Sorge」と苦闘した意味の大きさが改めて問われなければならないのであり、人間の「理念」不在の現代におつて、「Sorge」は間違ひなく新たな「人間像」の中心概念に成らざるを得ないであらう。

注記

- (1) 元々与えられた「研究発表」の機会には、△「憂い」再考―滯欧の経験から―と題して、フライブルクでの Fetscher の „Ent-Sorgung“ やウイーンのラインツ五号病棟における「老人の始末」の話にからめて、“Sorge”にまつわる話題を提供したが、その際には肝心の「ハイデガーとファウスト」の問題については内容に触れることができなかった。そこで、誌面を与えられたこの機会には、予告のみに終わったその「ハイデガーとファウスト」の部分だけを取り上げることにした。従って、「研究発表」の言わば続編として、表題も新たにすることを断りしておく。
- (2) Heidegger: Sein und Zeit. 尚、以下における『存在と時間』の引用頁はすべて、“Gesamtausgabe Bd. 2” (Klostermann, 1977) に依る。
- (3) Heidegger: Zur Sache des Denkens, Niemeyer, 1969, S. 88を参照。
- (4) 拙論「HOMO CURANS ―ハイデガーの『人間像』とシェーラー―」(弘前大学医療技術短期大学部紀要 第三号、一―十九頁、一九七八年)を参照。
- (5) Wahrig: Deutsches Wörterbuch, Bertelsmann, 1968を参照。
- (6) Burdach: Faust und die Sorge. Deutsche Vierte Jahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte I. (1923, S. 1―60), 以下のブルダッハの引用はすべて同書による。
- (7) Goethe: Faust Der Tragödie I. II., Reclam, 1980 S. 11
以下の「ファウスト」の引用はすべて同書による。尚、訳出にあたっては高橋義孝訳「ファウスト」(第一部 昭四二、第二部 昭四三、新潮社)を参照した。
- (8) Angst und Ent-Sorgung. (v. P. Winterling) Badische Zeitung, 14./15. Januar 1989/Nr. 11を参照。